なにわの源蔵事件帳

不知火（しらぬい）の化粧まわし

有明夏夫

不知火の化粧まわし なにわの源蔵事件帳
有明夏夫
© Natsuo Ariake 1988

講談社文庫
定価400円

昭和63年3月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

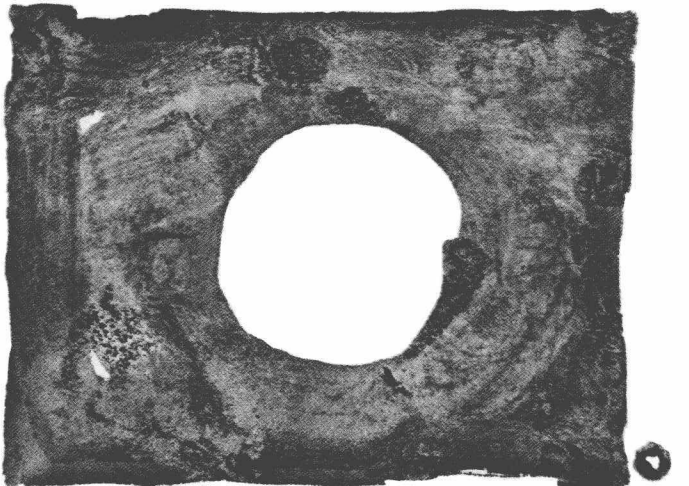
デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——東洋印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願いいたします。 (庫一)

ISBN4-06-184174-2 (O)

大将とわたし

佐木隆三



目次

灯台の光　7
不知火の化粧まわし　75
浪花富士の計画　129
印度からきた猿　197
解説　土居原作郎　271

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

灯台の光

1

講釈師樽堂春岳の『赤穂義士伝・赤垣源蔵徳利の別れ』が終わった。

大変な熱演だった。春岳が重々しく一礼すると、額からは汗がしたたり落ちた。彼がハリボテの三尺口から姿を消しても、客席の中ですぐさま動きだす者はいなかった。

海坊主の親方こと赤岩源蔵は、ことに酔った一人だろう。とにかく、赤垣源蔵とは一字しか違わないのだから、親近感を抱くのは当然である。まるで、己れが赤穂浪士の一員になったような心地だった。

「さあさあ親方、一杯いきまひょいや」

隣にいた近所の貸本屋が、源蔵に茶碗を差し出して、徳利を近づけてきた。

「おっ、こらえらいすんまへんな」

恐縮しつつも、遠慮せずに源蔵は酒を受けた。そして鯛を肴にチビリチビリやるうち、春岳、小春岳、春佐の三人も姿を見せて、ささやかな酒宴となった。

ここは天満天神社の境内にある花菱亭、講釈の定席である。時は明治十一年師走初めの夜、季

節の割には暖かい。『柳生二階笠』の春佐、『難波戦記』の小春岳はどちらもうまく読んだが、やはり年の瀬ともなれば、せめて一晩なりと春岳の『赤穂義士伝』を聴いておきたい気になる。車座になって酒を飲んでいる連中は、そんな男ばかりだった。

「先生――」

と、貸本屋が春岳に言った。「春海はんはまだ戻ってきまへんのか？」

「へえ、まだでおます。そうおめおめと顔出しはでけまへんやろ」

師匠の返事はまことにそっけない。

「いま、神戸の開港場にいるとか聞いたでえ――」

と、これは郵便配達夫。流石に耳が早い。

「そこで何しとんのん？」

源蔵が訊くと、

「そら、講釈だんがな。小さな席でやっとるとかいう噂だっせ」

「その噂なら、わても聞いとります」

春岳は静かに言った。「こっちへ戻ってきたいのは山々だっしゃろけどな、甘やかしたら癖になるよってに、ほったらかしにしてまんねん」

「もうそろそろ堪忍したんなはれ。春海はんがおらんと、やっぱり淋しいがな」

貸本屋の意見には、源蔵も同感だった。

「いや、そうはいきまへん。人の道に背いた者を、そうそう簡単に赦しとったんでは、世間さま

に申しわけがたちまへん」

律義な春岳は何度も小刻みに首を振った。

しかし、その世間さまのほうは、とっくに春海を許している。源蔵や貸本屋たちだけではなく、花菱亭の常連は、みんな春海の帰参を待っている。彼の『太閤記』が再開される日を、いつのことかと愉しみにしている。

樽堂春海は『太閤記』しか読まない講釈師である。しかもこれを読む時は、必ず徳川家康を罵倒するので有名だった。このため、旧幕中は合計二十七回も糸屋町の牢屋にぶちこまれている。東町奉行所の御抱え手廻りだった源蔵も、お役目上やむなく八回か九回春海を引っ立てた記憶がある。

もっとも、引っ立てたとはいうものの、他の咎人とはまるで異なる扱いだった。奉行所の与力や同心たちには、本気で春海を吟味するつもりなど毛頭なく、公儀と奉行の手前そういう形を整えたに過ぎない。もし春海を獄門にかけでもしたら、浪花の地には打ち毀しが起きただろう。

牢屋に入っても、春海は楽をしていたようである。とにかく顔と名を知られた彼が入ってゆくと、牢名主はすぐさま己れの坐っていた場所を明け渡して、一席やってくれと懇望したものだという。だから、春海は牢の内外を問わずに『太閤記』を読み続けてきたわけだ。

ところが、御一新後にはこの禁制が解けて、もう狸親爺をいくら罵っても構わぬようになった。目出度いことである。さぞかし、当人は喜ぶかと思いきや、これが逆だった。

張り合いがのうなってしもた、というのである。源蔵には芸人の心意気など解るわけもない

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

が、頭を抑えつける者がいなくなると、かえって遣る気は失せるものらしい。そしてその遣る気を、あらぬ方角で発揮し始めた。

女狂いに走ったのだった。相手が娘であろうが他人の女房であろうが、もうまるで見境なく、すぐに手に手を取って駈け落ちしてしまう。まず大抵は、女に愛想尽かしをされて戻ってくるのだが、そのうち、また別の女と姿を消す。

駈け落ちで有名な男には、いま一人歌舞伎役者の嵐徳三郎がいる。するとお節介なことに、あいつには負けるな、とけしかける者が現われる。「春徳の争い」はどちらが勝つかで、結構巷の評判を集めていた。

しょっちゅう駈け落ちを繰り返しているので、ここ数年春海の『太閤記』は完結したことがない。普通この講釈は三百六十席、正月に始まって年末に終わる。従って貸本屋の言うように、来年の頭から春海の講釈を聴くためには、いまが引き戻す絶好の時機だろう。

しかし師匠の春岳は、まだ赦す気にはなれないらしい。いずれは誰かが中に入って、取りなそうとするだろうが、もう少し様子を見るほうがよさそうだった。

「親方――」

花菱亭の親爺がそばへ来て耳打ちした。

「なんや？」

「京屋はんがお見えだすわ」

「わしに用事？」

「へえ」
「ほんなら、ここへ来たらええやないか」
「それが、ちょっと内緒の話らしおまんねや」
「ふーん、なんやろな？」
源蔵は茶碗を置いて、やおら腰を上げた。
京屋忠兵衛は、八軒屋で宿屋を営んでいる。古い馴染みだから、会いにくるのに不思議はないが、こんな夜分にわざわざ講釈の席亭までたずねてくるのは、かなり面妖な振舞である。何の用事か、まったく見当がつかなかった。
忠兵衛は名看板の下に突っ立っていた。
「お愉しみのとこを、えらいすんまへんな」
「いや、それはかめへんねん、もう講釈も済んだよってにな――それより、用事てなんや？」
「へえ、いま内藤さんがうちへ来たはりまんねん」
「内藤さんて、あの新撰組の内藤さんか？」
「そうだす」
「ほう、そら珍しやないか。一目会いたいな」
「ほな、これからうちへ来てくらはりまっか」
「行く行く」
源蔵は引き返さずに、そのまま表へ出た。

「わては人力車に乗ってきましたよってに、親方はこれで行っとくなはれ」
「おまはんはどないすんねん？」
「途中で摑まえまっさ」
「それぐらいなら、一緒に行こや。歩いたかてしれとる」
「いや、内藤さんは親方に頼みごとがある、言うたはるさかい、先に行っとくれやす。わては、じきにあとから追いかけます」
「そうか――ほな、そないさしてもらおか」
待っていた車夫は、源蔵が乗り込むと丁寧に毛布をかけて、すぐに走りだした。やはり師走である、頬に当たる風は皮膚を貫くようだった。

2

内藤与三郎とは、懐かしい名前である。
源蔵は長らく東町奉行所の御抱え手廻りを勤めていたが、新撰組との付き合いはあまりない。近づこうとも思わなかった。狼藉を働くしか能のない連中が多かったからだ。
第一、局長の近藤勇が嫌いだった。卑怯な男で、徒党を組まずには人を斬れなかったし、蛤御門の変の折などは、いつも御所の石垣の蔭にかくれていて、前を通りかかる者がいると、うしろから抜身を浴びせていたという。ことに大坂の地で、名与力として名の高かった西町奉行所の内山彦次郎を、些細な私怨にかられて暗殺したことは、いまなお赦せぬと思う。

局長がそういう男だから、下の連中がいい加減だったのは当然だろう。彼等のために泣かされた庶民は、大坂だけでも数知れない。その中にあって、内藤与三郎はものの道理を弁えた侍だった。

そう数多くは遭っていない。新撰組は京屋を定宿にしていたので、忠兵衛に用事があって訪れた時に、顔を合わせた程度である。それでも、さっぱりした気性の持主らしいことは判った。もし、平穏無事な時代に出会ったのであれば、長い付き合いになっていただろう。

京屋に着くと、女中はすぐに源蔵を離れの間へと案内した。与三郎の頭はもちろんザンギリになっていたが、その下の顔は昔のままだった。

「お久しぶりでおます」

「おう、元気そうだな」

「いやあ、もうあきまへん。齢だすわ――旦那さんこそ、ええ色艶したはりまっしゃんか」

「うむ、身体だけは達者だ」

与三郎の目つきや口許は、以前よりも柔和になったようである。

「旦那さんはいま、どこにお住まいだんねん？」

「籍は東京だがな、ここしばらくは京都におった――」

意外なことに、与三郎は警視庁に奉職していた。それが西南戦争で長らく鹿児島の地にあり、そののちは京都で戦後の処理に当たっていたのだった。

「さよか――それはそれはごくろはんでござりました」

私服なので、階級は判らなかった。それをよっぽど訊こうとして、源蔵は危うく言葉を呑み込んだ。新撰組にいた者が、新政府の中で出世する筈はないからである。

それからのしばらくは世間話。どちらにも初耳の話題は多いから、びっくりしたりさせたりするうちに酒肴が出て、やがて帰宅した忠兵衛も座に加わった。

「さて――」

与三郎は忠兵衛の顔を見て言った。「例の件だが、多少は話してくれたのか？」

「いいえ、まだしとりまへん――わての口で言うよりも、旦那さんから御説明願うたほうがええと存じまして」

「うむ、それもそうだな――」

と顔向きを変えて、与三郎は口調を改めた。「源蔵。おまえはおこうを憶えているだろう」

「おこう？」

源蔵は首をひねった。突然そう切りだされても、何のことやら判らない。

「孝子だすがな。御幸太夫」

と、横から忠兵衛。

「ああ、あのおこうかいな」

それなら憶えている。曾根崎新地に出ていた妓で、ものすごい別嬪だった。近藤勇が惚れ込んで身受けしたが、その折に奔走したのが忠兵衛である。

「いま、あの女は神戸にいるらしい」

「へえ、また神戸だっか？」
思わず口に出た。
「また、とはどういう意味だ？」
「いえいえ、別の知り合いが神戸におる、と聞いたもんだっさかいな――」
樽堂春海の名前を出してもはじまらないので、与三郎に話の先を促した。
御一新後十一年も経つと、人の運命はさまざまな変転を見せている。与三郎の物語った一部始終は、源蔵が初めて耳にする事柄ばかりだった。
二ヶ月前、京都の南禅寺で与三郎は一人の女に遭った。
孝子の姉の正子である。こちらは深雪太夫の名で、大坂の新町に出ていた。源蔵も名前ぐらいは知っている。姉妹とも、近藤勇の囲われ者になった、と聞いたことはあるが、幕府瓦解後の消息までは知らない。
正子は、八幡の大地主のもとへ、後妻として嫁いでいた。そして与三郎に頼むには、妹と近藤さんとの間に出来たお勇が、いまは祇園で舞妓になっているらしい、そこで手許に引き取りたいと思うが、夫はお人好しなのでそんな談判は手に余る、まことに申しわけないが先方と掛け合ってもらえまいか、とのこと。気の毒に思った与三郎は、すぐに祇園の茶屋へと赴き、難なく取り戻してやった。お勇は父親に瓜二つだが、己れの身の上については何も知らず、諄々と聞かせてやっても、よくは解せぬ風だった。しかし、まあ、伯母とは血の繋がった間柄である、二人で暮らしてゆけば、追々情愛も湧いてくるだろう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.